

右の手記は、(財)東京交通安全協会が編集発行している「^{あがな}贖いの日々」に掲載されているものです。飲酒運転で起こされた悲劇は、だれもが何かを失います。起こしなくとも起きてしまう交通事故は、意識を持つことから始まります。まさか自分には…とは思わずに、自分にも起こりうることだと知ってください。

平成21年6月1日から、飲酒運転に対する行政処分が大幅に強化されています。

酒酔い運転をすると

25点→35点 免許取消(欠格期間3年)

酒気帯び運転をすると

呼気中アルコール濃度 0.15mg/ℓ以上 0.25mg/ℓ未満

6点→13点 免許停止(90日)

呼気中アルコール濃度 0.25mg/ℓ以上

13点→25点 免許取消(欠格期間2年)

さらに欠格期間の上限も5年から10年に引き上げられました。

また運転者以外にも厳しい罰則が科せられます。

	運転者本人	車両の提供者	酒類の提供者 車両の同乗者
酒酔い運転	5年以下の懲役 又は 100万円以下の罰金	5年以下の懲役 又は 100万円以下の罰金	3年以下の懲役 又は 50万円以下の罰金
酒気帯び運転	3年以下の懲役 又は 50万円以下の罰金	3年以下の懲役 又は 50万円以下の罰金	2年以下の懲役 又は 30万円以下の罰金

飲酒運転

ビールはうまいが、飲酒後の運転の先には悲劇がある。



これからの暑い季節、汗をかいた後のビールは格別です。お酒を飲む機会も増えるかもしれません。しかし、その手でハンドルを握ることを決して行わないでください。あなたのその手は、人を傷つけるためのものではないはずです。

飲酒運転は、処罰が厳しくなるからしてはいけなのではありません。

あの時、あんなことをしなければ…
「贖いの日々」からは、つづられた辛さ、その行間に込められた悲しみが伝わってきます。後悔を先にすることはできませんが、後悔をしないための努力をすることは可能です。だから、しなければならぬのです。

大津町から事故での悲しみが無くなることを、期待しています。

命の重み

T. Y 会社経営(37歳)

人の命……。これ以上かけがえのないものはありません。私はあまりにも愚かで身勝手な行動から人の命を奪ってしまうという、取り返しの付かない過ちを犯してしまいました。

事故をおこしてからまもなく2年が経ちます。夜中に目が覚めると、時間を元に戻したい、すべて夢であって欲しいと幾度も考えます。これから先、被害者ご遺族にどのように謝罪をしていけば良いのか答えがなく悩みます。ご遺族の方は私が原因で幸せな毎日から一転して、先の見えない深い苦しみを抱えることになりました。謝罪の言葉も私にはありません。言葉ではあまりにも軽過ぎるからです。事故後、被害者ご遺族のもとへ伺い、私はただただ申し訳ありませんと、繰り返して頭を下げました。それ以上できることはありませんでした。人の命の重さを知りました。

当時、私は会社の事務所を移転したばかりでした。車を仕事で使うことはほとんどなかったのですが、その頃は移転のため荷物を運ぶことが多く、車で会社に行っていました。

事故の日はすべてが一段落した夜でした。帰宅途中で日頃からよく行くバーに立ち寄ったのです。車は近くの駐車場に止め、置いて帰るつもりでした。お酒を飲み、閉店後にタクシーを待っていましたが、その日はタクシーが来ませんでした。そして、それ以上待つことができず、自分の車に乗ってしまったのです。

心の中に過信が生まれたのです。ゆっくり慎重に運転すれば大丈夫だろうという考えがあったのです。私は普段より慎重に運転をしていたのを覚えています。しかし、それは「つもり」でした。慎重であれば、冷静であれば運転することなどなかったのです。しばらく走ると、車は自宅近くの本線と側道が合流する場所に近づいて来ました。私は本線の信号機の青色を確認しました。そして、側道に入るためにドアミラーで後方の確認をしました。

その瞬間でした。ドンという音と衝撃がありエアバックが視界を真っ白にしました。私は何が起きたのか解らずゆっくりブレーキを踏み、路肩に止めました。そのとき何か物が飛んできたという感覚でした。そして、運転席のドアを開け後方を見て血の気が引いていきました。オートバイと人が倒れていたのです。私はその場所まで行きました。男性がヘルメットを被ったまま動かず横たわっていました。その後は記憶がほとんどありません。

私は信号待ちをしているオートバイに衝突したのです。私の確認した信号は側道側の信号でした。しかし、信号の色がどうであれ前方に障害物があれば車を止めなければなりません。私はお酒で注意力が散漫になり、前方の確認というドライバーの基本すら怠っていたのです。時間とともに現実を理解していきました。自分のしたことの重大さを知り、絶望感が増していきました。そして、何よりも被害者のご遺族に何とお詫びをすれば良いのか、取り返しの付かないことにどのように謝罪すれば良いのかと……。

勾留期間が終わりすぐにご家族の所にお伺いいたしました。ご両親は息子に直接謝ってくださいと言われ、私は仏前に案内されました。彼は私のせいで命を奪われました。直接謝ることなど、もうできないのです。穏やかな表情の写真の彼が私を見ていましたが、私は目を合わせることができなかったのです。私の謝罪の気持ちが届くよう目を閉じて手を合わせました。ご両親はいまだに実感が無いとおっしゃっていました。まだ生きているような気がすると……。

そして、息子さんのアルバムを見ては涙が止まらなくなると、毎日がその繰り返しだとおっしゃいました。何も言えませんでした。すべては私の弱さが原因なのです。その後の私は仕事が全く手につかず、被害者の墓前に足を運ぶ日々が続きました。ご両親にも何度か電話をさせていただき自分の気持ちを伝えました。憎むべき私に優しい言葉を掛けてくださったこともあり、助けられた気持ちが多く残っています。

そして、判決の前にご自宅に伺ったとき、私に、こう言ってくださいました。息子の分まで、長生きして、人のためになるように生きてくださいと……。

私はこの言葉の重みを今まで考えてきました。長生きするというはその分、自分の罪と向き合うということ。人のために生きるということは、人間らしく生きるということだと思えます。そして、生かされていることを忘れない言葉でもあります。この言葉には「命の重み」が込められていると思いました。

私は一日、一日を大切に生きるようにし、自分を見つめる心を忘れないよう心掛けています。罪を犯した以上、悔やんでも悔やみきれない思いは一生続くでしょう。過ちを忘れることなどありません。人の命を奪ったということをよく考え、悩み、苦しんで生きていかなければならないと思っています。それが謝罪をしていくということなのかも知れませんが、答えが見えてくるかは分かりませんが、近づく努力を忘れずに、犯した罪の重さを深く受け止めていきたいと思っています。